

速記録（平成十一年一月二十八日 第二八回口頭弁論）

事件番号 平成四年（ワ）第二〇七五号・平成五年（ワ）第二二二五号・平成六年（ワ）第二三〇

八号

本人氏名 張 ■ 道

原告ら代理人（武田）

あなたは現在無職ということですが、光州市で、退職前はどんなお仕事をされていたんですか。

退職する前は、光州市内の中学、高校の校長、そして校長退職後は、教育院という教育機関の院長をしていました。

公立の中学、高校の校長ということ、公務員だったわけですか。
はい、そうです。

甲B第三九号証、甲B第四〇号証を示す

この調査票は、あなたが自分自身で記入されたものですか。

はい、私の自筆です。

一番上に「原告本人署名」とありますが、ここの記載も、あなたが書いたもの

ですか。

はい、そうです。

ここに書かれてあることは、記憶に従って正確に書かれておりますか。

はい。記憶していることは、すべて正確に書いたつもりであります。

あなたは、浮島丸事件の当時、浮島丸に家族全員で乗船していたんですね。

はい、そうです。

そして、この事件で、お母さん、お姉さん、妹さんの、三名が亡くなったという事ですか。

はい、そうです。

お父さんと、お兄さんと、あなたが、助かったということですか。

はい、そうです。

甲A第五九号証を示す

浮島丸死没者名簿の一六丁の表、ここの五人目から「中山啓子」「中山幸子」

「中山花子」の三名の名前がありますが、これが順に、あなたのお母さん、お姉さん、それから妹さんですか。

はい。

そうすると、あなたの家族の創氏名は中山というふうに言ったんですか。

はい、そうです。

あなたは、浮島丸に乗船した当時は何歳だったんですか。

一三歳です。

あなたは一九三三年生まれですから、一九四五年の事件当時は、数えでは一三歳、満でいうと一二歳ですね。

数えで一三歳です。

お兄さんは、あなたより幾つ年上だったんですか。

五歳上です。

お姉さんは、幾つ年上だったんですか。

はっきり覚えてないんですけれども、多分七歳ぐらい上だったと思います。

お姉さんは一九二七年生まれというふうにあなたの調査票に記載されているんですが、そうすると六歳年上になりますか。

多分、そっちが合ってると思います。

それから、妹さんは調査票では一九三六年生まれなので、あなたより三つ年下ということになりますか。

はい、三つ年下です。

それでは順に、御両親が日本に来たときのことから話を伺います。御両親は、一九二八年に韓国から日本に来たということですね。

正確には、その一九二八年という年を覚えてるわけではありませんけれども、そういうふうには認識しております。

日本に来た当時は、御両親とお姉さんの三人で来られたんですね。

はい、そういうふう聞いております。

そうすると、お兄さんとあなたと妹さんは、日本で生まれたということですか。
はい、そうです。

御両親は、日本に来る前、韓国でどんな仕事をされていたんですか。

私が生まれる前のことなので確かなことを知ってるわけではありませんせんけれども、聞くところによると、故郷で農業をしていたということ

です。

御両親がなぜ日本に来られたのかというのは、聞いておられますか。

もちろん、確かなことをその当時聞いたわけではありませんけれども、日本にお金を稼ぎにきたというふうに聞いております。

日本には、頼りになる親戚や友人などはいたんでしょうか。

それは、全然知りません。

同じ故郷から一緒にだれかと出てきた、ということだったんでしょうか。

それも、分かりません。

御両親は、日本の北海道に来たんですね。

はい、そうです。

最初に住まわれたのは北海道の常呂郡というところですか。

そういうふう聞いております。

ここで農業を始めたということですか。

はい、そうです。

お兄さんとあなたは、ここで生まれたということですか。

はい、そうです。

その後、北海道の北見市に移ったということですか。

はい。

ここでは、どんな仕事をされていたんですか。

土木工事をしていたというふうに聞いてます。

土木工事をしていたというのは、だれかに雇われて職人として働いていたのか、自分で土木工事業を自営していたのか、どちらですか。

私の記憶では、お父さんが人夫を率いて下請をしていたというふうに認識しております。

ちなみに、妹さんは常呂郡で生まれたのか、北見市で生まれたのか、どちらか分かりますか。

妹も常呂郡で生まれました。

この土木業は具体的にはどんな仕事をされていたのか、聞いておられますか

私が現場に行って見物したこともあります。道路工事だとか、トンネルを造る工事なんかをしていました。

一九四二年に、青森県の下北郡大湊のほうに移住したということですか。

はい、そういうふうに記憶しております。

ここでも、土木業を営んでいたんですか。

はい、そうです。

なぜ青森県のほうに移り住んだのか、分かりますか。

正確なことは何も分かりませんが、当時、本土死守ということの下北半島の大湊は軍事的な要害の地でありました。で、多分そこに行けば仕事一杯あるんじゃないかということで行ったんだというふうに考えております。

そうすると、青森に来てからは、主に日本の軍事施設の建設の請負をされていたんでしょうか。

はい、そういうふうに認識しております。

甲A第五九号証を示す

この死没者名簿の一六丁の表、ここに死没者としてあなたのお母さんやお姉さんや妹さんの名前が書かれてるところの上のところ「東邦工業」という名前

があるんですが、この東邦工業とあなたのお父さんがされていた土木業の關係、これは分かりますか。

多分、この東邦工業という会社の下請をしていたんではないかと思ひますけれども、正確なことは分かりません。

お父さんの土木業の名称ですね、何という名称で土木業を営んでいたのか、聞いておられますか。

家に帰れば記録したものがありませんけれども、今はちょっと思ひ出せません。

以前聞いたときに「菅原組」というふうに私が聞いてるんですが、その名前に間違いないでしょうか。

はい、そういう名前は覚えてます。

お父さんが雇われていた職人さんというのは、同じ朝鮮から来られた人なんでしょう。

はい。全部韓国人であつて、自由労働者です。

それは、韓国から日本に仕事を求めてきた人たちということですか。

どういういきさつで来たのか、その内容については分かりませんが、
ども、皆さん自由労働者であるというふうには聞いております。

それで、あなた自身の話ですが、あなた自身は日本の国民学校に通われていた
んですね。

はい、そうです。

この当時、朝鮮から来たということ、あなた自身、何らか差別とかつらいこ
とを体験したということはありましたか。

日帝時代であり、軍国主義の時代でした。私たち韓国から来た者にと
って、自分の住んでいる地域、また学校で聞いて一番嫌だったのは、
朝鮮人という言葉でした。その当時の朝鮮人という言葉の意味は、一
番未開で、一番下積みで、礼儀も知らない連中だという、蔑視する意
味でありました。

そうすると、あなたは学校で、朝鮮人だということ、でいじめられたりしたとい
うことがあったんですか。

朝鮮人だといってあざけられるたびにけんかをしたことを覚えていま

す。で、たしか三年ぐらい前だったと思うんですけども、大湊の人から手紙がきまして、あのころおまえは朝鮮人だと言われるたびにけんかをしていたなあということが、書いてありました。彼は、学校の先生です。

あなた自身の気持ちとしては、ほかに一緒に習っている日本の生徒と自分が違うというような認識というのは、あったんでしょうか。

別にそういう認識はありませんでした。そのときは、私自身が日本人でした。

それで、終戦のときまで大湊で暮らしていたんですか。

はい、そうです。

(以上 鈴木秀子)

原告ら代理人（武田）

終戦は、いつどのようにして知りましたか。

八月一五日に、天皇の放送があるということで、町内の友達のうちに行つて、友達の家族と一緒に、その放送を聞きました。

その友達というのは、同じ朝鮮出身の方ですか。

日本人です。

そこには、あなた一人で遊びに行っていたんですか。

何人かは分かりませんが、私一人ではなくて、周りの同じ町内の子供たちと一緒にでした。

そこで放送を聞いて、あなたはどんな気持ちだったんですか。

その家族たちが非常に、ものすごく悲しんでいました。私も日本の天皇が負けてしまったんだ、こんなことがあっていいはずがないという気持ちで、とても悲しい気持ちでした。

あなたの家族は、終戦について、どういうふうに思っていたか分かりますか。その放送を聞いて、うちに帰ってみると、家族たちは家中で万歳を

叫んで、歓呼の声を上げておりました。

なぜ喜んでいたか、分かりますか。

お姉さんに、どうして天皇が負けたのに、そんなに喜んでおられるんだと聞きましたら、そのお姉さんが、私たちの国が解放されて、主権を取り戻すんだというふうに話してくれました。そのときに私は、解放というのは何だか、全然分からなかったんですけれども、お姉さんが絵を見せたりして、詳しく説明をして、我が国がこれで主権を取り戻して、独立した国になるんだということを説明してくれたので、何となく分かったような気になりました。

終戦後、浮島丸に乗船することになりましたね。

はい。

浮島丸に乗船したのは、いつだったか覚えていますか。

八月二二日ごろだったと記憶しております。

八月二二日の夜に、浮島丸は出港しているんですが、あなた方が乗船した晩に、出港したということになりますか。

大湊といひまして、私たちが住んでいたところと、出港した港とは、かなり距離があったというふうに記憶しております。まず、いったん菊池棧橋まで行って、菊池棧橋で一泊して、その翌日の午後にはしげに乗って、船に乗りました。

それが、二二日だったということですね。

はい。そういうふう覚えております。

浮島丸に乗船することになった経緯ですね。なぜ、浮島丸に乗船することになったか、分かりますか。

その当時は、全然何も知りませんでした。後から父に聞いたところによると、当時韓国人たちは、自分たちが解放されたんだということ、万歳万歳と叫んで、日本の海軍司令部のほうから見ると、大変騒ぎを起こしそうな存在だったということ、朝鮮人たちを、騒ぎが広がる前に、一日も早く返してしまえという方針にのっとり、船を出すことになったと。もしこの船に乗らないと、この先、船便はないぞと。しかも、今までくれた配給は、朝鮮人に対する配

給は、なくなるということ、自由労働者で来ていた人も、徴用で来ていた人も、とにかく乗らないと、船は出ないし、配給もなくなるということ、慌てて乗ったという話を、父から聞きました。

今の話は、全部お父さんから聞いた話ですか。それとも、何らかの新聞記事であるとか、その他の報道によって、知った話というのが入っていますか。

父から聞いたことが大部分です。しかし後に、こういうことが報道によっても、たくさん報道されたのも事実です。

菊池棧橋までは、家族だけで行ったのか、それとも、ほかの朝鮮人の人と一緒に行ったのか、どうですか。

そのとき私が、その場で覚えていたわけではありませんけれども、父の下で、年上のいところが書記をしていました。その人の話によると、父が引き連れていた一つの飯場の労働者、皆と一緒に、菊池棧橋まで行ったということです。

菊池棧橋まで行くときに、朝鮮人の人たちだけで行ったのか、それとも日本の軍の関係者か何か、引率して行ったのか、そこら辺は分かりますか。

軍人が引率したような記憶は、ありません。軍人に引率されて行った記憶はありませんが、菊池棧橋に行ってみると、はしけに乗るところは、ものすごい混乱でした。日本の軍人が日本刀を持って、今から考えると、それは秩序を守ろうとしていたのか、強制的に乗せようとしていたのか分かりませんが、軍人がいました。

住んでいるところから、菊池棧橋まで行くときに、菊池棧橋に行けば、浮島丸に乗って韓国に帰れるという話は、だれから聞いたのか、分かりますか。

お父さんから聞きました。

お父さんが、だれから聞いたのか分かりますか。

それは分かりません。多分、日本の海軍警備隊で、そういう船が出るという発表をしたんじゃないかと思えますけれども。

菊池棧橋に来たときには、先ほど大混雑とおっしゃいましたが、たくさんの人たちが、棧橋に集まっていたんですか。

はい。大混雑でした。

そこに、何人くらいの人たちが集まっていたか、分かりますか。

数としては分かりませんが、菊池棧橋には最近、行ってないんですけれども、菊池棧橋自体は、非常に小さい棧橋だったと思います。大混雑しておりますので、少なくとも一〇〇とか、二〇〇という数字は、あったんじゃないかと思っています。

そのとき既に、浮島丸に乗り込んでいる人たちもいたんですか。

いたと思います。

先ほどおっしゃっていましたが、浮島丸に乗船するときは、日本軍の軍人が整理をして、乗るようにという命令とか、そういうことがあったんですか。

はい。それを見ました。

日本人の、そういった軍人は、何人くらいいたか覚えていますか。

数は分かりませんが、そんなにたくさんいたとは思えません。

そういう乗船を促していた人たちは、数人程度ですか。

よく分かりませんが、覚えていませんけれども、そんな多い数ではなかったと思います。

浮島丸に乗船したときの状況ですが、乗船している人たちは、どんな様子で

したか。何人くらいいましたか。

その当時は全然、数を数えることはできません。私は分かりませんが、父の話では、六〇〇〇名から七〇〇〇名、乗っていたと聞いています。

見た感じ、あなたが記憶している、船内の光景ですが、かなり人がぎゅうぎゅう詰めという感じだったのか、そこら辺はどうでしたか。

人が座っている場所は、人を避けながら、よけながら行かないといけないくらい、たくさんいました。

あなた方の家族は、船のどの辺りに乗ったんですか。

船に乗船させる側の方針として、女、小さい子供、それから体の弱い人は、船の底のほうに乗るように、男たちは上に乗るようにということで、分かれて乗りました。上といっても、貨物船ですので、貨物を載せる、がらんとした倉庫みたいなところが、何階にも分けてありました。男たちは、そこにいました。

船の底に乗ったのは、あなたの家族のうち、だれですか。

お母さん、お姉さん、妹です。私もです。

あなたも、まだ小さかったからですね。

上のほうに、お兄さんと、お父さんが乗っていました。

あなたが乗った船の底というのは、一番最下層でしたか。

かなり下のほうだというだけで、それが一番下かどうか、多分、一番下は機関室じゃないかと思えますけれども。一番下かどうかは分からないです。

人が乗っている部分でいうと、一番下になるんですかね。

それも、はっきりとは分かりません。多分、一番下じゃないかと思えますけれども、正確には分かりません。

何層にも分かれて、人が乗っていたという状態だったんですね。

今、それは三階だったか、四階だったか覚えていませんけれども、そういうふうになっていました。

お兄さんが乗ったところというのは、お母さんとか、あなたが乗ったところよりも、何階も上の部分だったんですか。

かなり、何階も上のほうでした。

そうすると、お父さんの乗った部分と、お母さんの乗った部分の間に、また人が乗っているという状況ですね。

船の甲板の上から見ると、一番下まで見えただそうです。横に、こういうふうは何層にもなっていて、ですから自分は、お父さんのいるところから、いったん甲板に上がって、下に下りるといったので、その間に人がどういふふうに乗っていたかとか、そういうことは分かりません。

要するに、層というのは、何階建てということの層なのか、横に分かれている形なのか、どちらでしょうか。

まず、お父さんたちがいるところからは、はしごで甲板に上がって、甲板の真ん中辺りからは、階段があったそうです。その階段を下りて、お母さんのいる底のほうまで行ったと。

少なくとも、お父さんのほうが、お母さんよりも上にいる状態ですね。

はい。ずっと上にいる。

船内での生活ですが、船内では何をされていたんですか。

別に、することはありませんでした。お母さんのところにいて、退屈すると、お父さんのところに行って、お兄さんと遊んだり、また下に下りて、妹と遊んだりしていました。

行ったり来たりするのは比較的、楽にできたんでしょうか。人をかき分け、かき分け行くような状況だったか、その辺はどうでしょうか。

比較的、自由に行けました。

そうすると、通路とか階段には、人はいない状態ですか。

はい。通路や階段には、人はいません。

いた場所というのは、どのくらいの広さ、一人がどのくらいの面積を使えるような広さだったんでしょうか。

何坪、何平米とか言えないんですが、畳というか、ござを敷いたようなどころに座っている状態でした。

例えば、寝るときに、十分横になって寝られる状態でしたか。

十分ゆったりと横になるほどの余裕は、なかったように記憶してい

ます。

食事はどうしていたんですか。

握り飯と、みそ汁をもらって食べた記憶がありますが、それをどうやって支給されたかということは、覚えていません。

トイレは十分、数はあったんですか。

それは覚えていません。

舞鶴港で今回の事件が起こったわけですが、舞鶴に行くまでの間、浮島丸の行き先や、いつごろ到着するのかについて、船内でだれでもいいですが、話を聞いたことはありませんか。

そのときは、私は何も知りませんでした。

朝鮮に向かうはずなのに、何か様子がおかしいというようなことは、ありませんでしたか。

出港してから、お父さんが家族全員がいる前で、この船はどこかおかしいぞと。もし途中で、どこかに寄港するようなことがあったら、この船は釜山には行けないかもしれない、という話をしました。

それはお父さんが、あなたの方家族にしたんですか。

そうです。

そのお父さんの話というのは、何を根拠に言っていたのか、分かりますか。

そのときは全然、知りませんでしたけれども、後になって、お父さ

んから聞いた話では、お父さんが大變親しくしていた、陸軍派遣の

南憲兵伍長という人から聞いたということでした。

それは、いつ、どこで聞いたということでしたか。

出港後に、南さんも、家族と一緒にその船に乗っていて、お父さん

が、どうしても君も乗っているんだと言ったら、私が乗らないと、も

し私が乗らないと、自分の身に危険があるというので、危険を感じ

て乗ったというふうに、南さんが説明していました。それも、後か

らお父さんから聞いた話ですけれども。

南さんは、自分が乗らないと、自分の身に危険があるという話ですか。

はい。そういうふうに聞いています。

その南さんが、お父さんに、途中で寄港するようなことがあると危ない、と

いう話をされたということですか。

はい。そういう話を、南さんがお父さんにしたということ、後から父に聞きました。

それは途中で寄港すると、何が危ないと、どういことが起こるのかと、そういう話は聞いてないんですか。

それは、全然分かりません。

南憲兵伍長が船に乗っていた理由も、詳しくはお父さんは聞いておられないんですか。

はい。もちろん分かりません。知らなかったと思います。

お父さんがあなたの方に、船の中でそういう話をしたというのは、出港してどのくらいたったときだったんですか。

多分、出港後、一日くらいしてからだったと思います。それも、この船が爆発するとか、そういう具体的な話ではなくて、危ないから、むやみやたらに歩き回るんじゃないと、お母さんたちと一緒にいなさい、という話でした。

それ以外に、朝鮮に行かずに、どこかに寄港するというような話が、周りであつた。うわさになつていたとか、そういう話を聞かれたことはありませんか。

私は当時、全然知りませんでした。後になって、韓国に帰ってから、そんなことがあつたと、うわさが流れていたという話を、後になつて聞きました。

浮島丸が舞鶴港に近づいたときですが、陸地が近づいてくるということであつたが、その陸地がどこなのかというのは、そのときに分かりましたか。

当時は全然、分かりませんでした。後からお父さんに聞いた話ですが、けれども、お父さんはそのとき、新潟だなど思ったそうです。

朝鮮に着いたとは、思っていないわけですか。

そうは思っていないかったです。

なぜ、こんなところで寄港するのか、ということについて、お父さんや、ほかの人たちから何か聞いた記憶がありますか。

当時は全然、そういう話は聞いていません。

あなた自身は、どのように思っていたんですか。

当時は全然、分かりませんでした。後から推測するところでは、もし、あれが爆発、爆破を目的としたものでないならば、給油か、給水ではないかと。それは、後になって推測するところですから。舞鶴港に近づいたとき、あなたはどこにいたんですか。

甲板の中央部にいました。船の底のほうで、お母さんたちと一緒にいたんですけれども、陸地が見えるというので、陸地が見たくて、上って行きました。妹も、私の後からついてこようとしたんですが、お母さんが危ないから行っちゃだめということ、妹はそのままお母さんと一緒に残って、私だけ甲板に出ました。

お父さんも、お兄さんも一緒にではなかったんですか。あなただけ。

はい。そのときは私一人で、甲板の上におりました。

あなたが、甲板の上に乗ってから見た様子を、順に話してください。

甲板の中央部分にいたんですけれども、船が急に速度を緩めて、止まるほどゆっくりになりました。そのときに、浮島丸はとても大きな船で、それよりは規模の小さな船が、脇をすり抜けて、先に行く

のが見えました。

その後、爆発するまでに、何か変わった様子はありませんか。

船が、ほとんど停止した状態になりました。私は別に、特に注目していたわけではなくて、ぼんやりと見ていたんですけれども、船の前のほうから、軍用ボートが下りてきました。別に、特に関心もなく見ていたので、詳しく何人ということは分かりませんけれども四、五人くらいの軍人がボートに乗って、出発しようとした瞬間に爆発、パーンという音がして、自分の体が宙に跳ね上がりました。

その軍用ボートが下ろされて、軍人が乗って、浮島丸から離れていく様子というのは、あなたが実際、自分の目で見たんですか。

はい。私が自分の目で、はっきり見ました。それは、船の一番前の部分からでしたので、多分、そんなにたくさんの方は見ていないと思うんですが、後から聞いた話では、お父さんもそれを見たということでした。

そのボートは、大きさとしては、どのくらいの大きさか、分かりますか。

それは分かりません。

ボートは、ゴムボートみたいな形ですか。それとも船の形でしたか。

船です。船の形をした、手で、ろでこぐ。

それは、浮島丸に搭載されていた船なんですか。

そうだと思います。

その船は、一隻だったんですか。それとも何隻か……。

そのボートは、甲板に何隻も載っていました。

あなたが、浮島丸から離れていくのを見た船は、何隻だったんですか。

それは、一隻です。

その船は、一隻に何人くらい乗れそうな船でしたか。

何人乗れるかというのは分かりませんが、そのときは四、五人だっ

たと思います。

乗っていたのが、日本の軍人であるということは、すぐ分かったんですか。

そのときは、全然分かりませんでした。

そうすると、先ほど軍人が乗ったと言ったのは、何を根拠にしている

んですか。

お父さんが、それを強く主張なさいましたので。

あなたが見ただけでは、その当時は、だれが乗っていたのか分からなかったんですね。

はい。私の目だけでは、だれだったかは全然、分かりません。

浮島丸がパーンという音で爆発したということですが、その後の様子、あなたが見た様子を順に話していただけますか。

もし日本政府が主張しているとおおり、機雷による爆発であったならば、爆発した瞬間、人は左右に揺れるはずだと思うんですが、上下に、空中に飛ばされて落ちるという状態でした。船が二つに割れるほどの大きな機雷による爆発であったならば、当然大きな水柱が立って、水しぶきを浴びるはずなのに、私は一滴も水を浴びていません。ほかの生存者たちの証言によっても、水を浴びた人はいないので、私はお父さんの主張のとおり自爆であると、今でも信じています。

(以上 坂本 史)

原告ら代理人（武田）

先ほど南憲兵伍長という名前が出て来ましたが、この方は日本人ですか、朝鮮人ですか。

韓国人だというふうに聞いております。

そうすると憲兵というのは不正確ではないですか、朝鮮人に憲兵というのはいないはずだと思っております。

私は分かりませんが、父から聞いた話で、海軍には憲兵制度がなくて、陸軍から派遣された憲兵だというふうに聞いております。

それから話を戻しますが、あなた自身がその当時見た記憶だけで答えてほしいんですが、爆発したあと、船はどのようなようになったんですか。

正確に二回とか三回とか言えないんですけれども、初めの爆発に続いてパンパンという音がして、船が真ん中から割れて、真ん中の中間部分の水に沈むという形で両側が上に出ました。初めは三〇度ぐらいの角度だったと思うので、人はまだその水上にある船の先のほうに登って行くことができたんですけれども、だんだんその角度が垂直に近く

なって、登って行こうとしても海に落っこっちゃうような状態になりまして、更にその船が時計と反対の方向に回り始めたので、甲板の上にも船が回るので海に落ちてしまうような状況になりました。

そうすると、爆発音は一回だけじゃなくて何回かあったわけですか。

二回か三回か分かりませんが、一回ではなかったと、その後にまたパンパンという音がしました。

それはあなたははっきりと覚えているんですか。

それははっきり覚えていません。

それでそのときに水柱が上がらなかったという記憶なんですか。

全然上がりませんでした。

それで船が真ん中から割れて中から沈んでいったときに、あなたはどこにいたんですか。

前のほうの甲板の上にいました。

そうすると、船が沈んでいくときにはあなたは先ほど言ったように船の先のように登って行こうとしたんですか。

爆発したときに甲板にいたので、そのままくっついておりました。

ほかに甲板の上に人はいたんですか。

立地の余地がないほどみんな甲板にしがみついていた。

それで、その人たちは甲板の先のほうに登って行こうとしていたんですか。

はい、もちろんそうです。

それでその後、先ほど時計と反対回りに船が回り始めたとき、こう言いましたが、回ったというのはどういうふうに戻ったんですか、海と並行に戻ったのか、それとも、倒れるような形で船が回ったということなのか。

こういうふうには（両手で動きを示して）回っていききました。

そうすると、船が、要するに左側に傾きながら倒れていくような感じで回ったということですか。

甲板の上に立っている者にとっては左のほうに傾きながら落ちていくような感じでした。

それで、それによって人が船から振り落とされて海の中に落ちていくという様子が見えたんですか。

はい、たくさん見ました。

海の中ですね、これはどういう様子でしたか。

もう既に海は重油が流れておりました。重油のタンクが爆発したのかどうか分かりませんが、重油が厚い層になって海の上に流れておりまして、海に落ちた人は、いったん沈んでから上がってくる時にはもう油まみれで真っ黒な状態で、そのまま沈んで死んじゃった人もいます。しょうし、お互いにつかみ合いを始めて、もう阿鼻叫喚、地獄というものがあればあれが地獄ではないかと思われるような状態でした。そうすると海の中にもたくさん落ちている人というのはあなた見たんですか。人も荷物もたくさん海に落ちておりました。

あなたは、船が左側に傾いて倒れていくときは、左側にいたのか、右側にいたのか、どちらにいたんですか。

左側にいたような記憶があります。

それで沈んでいくまでの間、あなたはどうしていたんですか。

まずとにかく甲板にしがみついておりますけれども、今お話したよ

うに左側に回っていったので、人々がみんな海に飛び込んでいました。私も何の考えもなく、飛び込まなくちゃ死んじゃう、飛び込んだら助かるんじゃないかというような気持ちになりました、飛び込もうとしました。

そのあとどうなったんですか。

私が飛び込もうとした瞬間、後ろから背中をつかまれました。で、振り返ってみるとお父さんがいました。お父さんが、飛び込んだら死んじゃうぞと、たとえ死ぬにしてももうこの甲板の上で死のうと言って私をつかまえて放しませんでした。

そのあとどうなったんですか。

幸いなことに左のほうに回っていた船がまた再びゆっくり右のほうに戻っていきましましたので、徐々に甲板は元の状態に戻って、徐々に徐々に沈んでいく状態でした。

それであなた方はその後どうしたんですか。

左に回っていた船が元の位置に戻って、だんだんだんだんゆっくりゆ

っくり沈んで行って、あともう少しすると船の前のほうまで沈んじやいそうになったときに、救助船が来て助けてくれました。救助船と言いましたけれども、若い女の人がるでこぐ船でした。

そうするとあなたとお父さんは、沈んで行くときに船の先のほうですね、前のほうに上がって行っていたわけですか。

はい、そうです。

あなた方と一緒に船の先のほうに最後までいた人というのは何人ぐらいいましたか。

確かな数字は分かりませんが、かなりの人が一緒に船の前の部分にいたのを覚えています。

あなたのお兄さんはその中にいたんですか。

甲板にはいませんでした。見えませんでした。

そうすると、あなたとお父さんはその救助船に乗って助かったということですが、ほかに何人ぐらいその船には乗ったんですか。

多分、十何名か乗っていたのではないかと思えます。

そういった救助船というのはそのほかにも何艇か来ていたんですか。

何そうか来ていました。

それで、あなたのお母さんやお姉さん、妹さんがどうなったか分かりますか。

その瞬間には全然分かりませんでした。

それで救助船に乗って海岸まで行ったわけですか。

はい、そうです。

海岸に着いてからどうしたんですか。

救助船が浜辺に着くやいなや、浜辺では助けられた人たちがあちこちに固まって何人かずついました。そこに私はお母さんを捜して、お母さん、お母さんと呼びながら捜して回りました。

それで家族には出会えたんですか。

会えませんでした。

お兄さんはいませんでしたか。

私が救助されて浜に着いてすぐ捜し回ったときにはお兄さんも見付かりませんでした。が多分分暗くなってからだというふう覚えてい

ますけれども、やはり同じようにあちこちに散らばって集まっている人たちの中を、お母さん、お母さんと捜し回っている私を、兄さんが、光雄、光雄と呼んで見付けてくれました。私の当時の名前は光雄でした。

そうすると、お兄さんとは海岸で出会えたわけですか。

はい、そうです。

その海岸には助けられた人たちというのは何人ぐらいいたか分かりますか。

あの海岸一杯にあちこちに一〇名、何十名という形で集まって、それが全体で何人になったかは分かりません。あのときは八月だったんですけれども、かなり暗くなってから寒くてたいまつをたいて何人かずつ集まっていました。

それであなた方三人ですね、お兄さんとお父さんと。は、その後どうしたんですか。

海軍の兵營の体育館のようなところに救助された人たちはみんな集まって収容されました。

それで、そこには何人ぐらいの人たちが集められていましたか。

正確には分かりません。大きな体育館が一杯になるくらいでした。

そうすると、何十人ではなくて一〇〇人以上、何百人ということですか。

一〇〇人の単位だと思います。

そのあとあなたは下関まで汽車で行って、下関から連絡船で帰国したんですね。

はい、そうです。

お金なんかはあったんですか。

お父さんもお兄さんも私もほとんど夏服で、半ズボン、そでなし、半そでの状態で、一文も持たない状態で救助されました。

お金はお母さんが持っていたんですね。

現金、それから貯金通帳、債券、かなりのものがあつたはずなんですけれども、全部お母さんが保管、管理していました。

そうすると無一文で、韓国までの旅費であるとか、その間の生活費なんかはどうしたんですか。

金■連という、さっき話をしましたけれども、父の下で働いていた

とこ、私の年上のいとこが、少しばかりお金を持った状態で救助されましたので、そのいとこが少し分けてくれて、それを旅費にしました。そのいとこは今もソウルに暮らしております。

それで、韓国に帰ってからは、故郷には帰らずソウルに行ったんですね。

はい、そうです。

なぜソウルに行ったんですか。

私は当時は分かりませんでしたけれども、あとから父に聞いた話では、もう無一文になってしまって、しかも女の家族がみんな死んでしまっ
て、もう故郷に帰ったところで一体何になるんだとお父さんは考えて、
どうせ乞食をするんだらばソウルで乞食をしようということでした。私
たち兄弟を連れてソウルに行ったというふうに聞きました。

で、ソウルで余りお金も持ってなくて、どうやって生活をしたんですか。

当時は腕時計がとても貴重な時代でした。幸いなことに父も兄も私も
腕時計をしておりましたので、その時計を売ってしばらくの食費に充
てました。

その後にはどんな仕事をしたんですか。

どういう仕事をしたというよりも、当時ソウルの鐘路区にありました、海外同胞救助所というところに行きました。

その救助所ですか、で、まあ寝泊まりはできるといふことですね。

はい、そうです。寝泊まりできます。それからあそこは馬事界と言つて、元は競馬の何かする場所だったそうですが、広い場所があつて、そこで簡単に寝泊まりすることはできました。

で、お金を稼ぐのはどうやって稼ぎましたか。

海外同胞救助所に行きましたけれども、そこでは長くはおれませんので、すぐお父さんが私たち兄弟を連れて、当時朝鮮総督府の官舎があいておりました。そこでしばらく寝泊まりしながら私たち兄弟が小さな板にたばこだとかガムだとかを乗つけて売って歩きました。

そうすると、あなたとかお兄さんがそういういったもの売りをして生活費を稼ぐという、そういう生活だったんですか。

とても子供たちの稼ぎで生計を立てるなどというものではありません。

でしたけれども。

お父さんは仕事はされなかったんですか。

当時、お父さんはあちこちを訪ねて行って浮島丸事件を暴露することに熱中していました。

そうすると、家族三人、一応食えることは食べられたんですか、そういう生活で。

食えることができたというよりは、命をつないでいたという感じですよ。お父さんは、この事件でお母さんとそれからお姉さん、妹さんを失って、相当落胆されていたんでしょうか。

落胆というか、もうとてもそれはお話にならないくらいでして、釜山に上陸するやいなや、釜山には逆に日本に帰ろうとする日本人たちがたくさん集まっていたんですけれども、あいつらをみんな殺してやると言って歩き回るくらいでした。

お父さんは、あなた方二人と一緒に自殺をすることまで考えたということがあったんですか。

はい、そんなことがありました。

それは具体的にどんなことがあったんですか。

あるとき、お父さんが南大門で持っていたお金を全部なくしてしまうということがありました。その後で麻浦というソウルの中を流れている河の縁なんですけれども、そこに行って私たち子供二人を立たせたまま、いつまでも暗くなるまでじっとしていたことがあります。そのときは何が何だか分からなかったんですが、あとから聞いたらあのときおまえたち兄弟二人を殺して自分も死ぬつもりだったと言っていました。

それから、先ほどお父さんが浮島丸事件のことをいろいろなところに告発したりしていたということを言われたんですけれども、どこにお父さんが行ったか聞いておられますか。

まず釜山に上陸するとすぐに、さっき話しましたけれども、乗務員が船を離れた途端に爆発したということ釜山日報に告発いたしました。その告発によって新聞記事が出たんですか。

一九四五年九月一日付けの社会面のトップ記事に出来ました。その新聞はコピーをして現在私が保管しております。

甲A第一〇号証を示す

これが今言われた記事ですか。

そうです。

ここに、これは張鐘植の話として記事が出ているんですが、これがお父さんですか。

そうです。

これが浮島丸事件の一番最初の報道になるんですか。

私の知るところでは一番最初の報道だと思います。今も理解できない点がありますが、もし日本政府の発表のとおりだとしても五八〇名という第二次大戦後一番大きな海難事故でした。生存者は三〇〇名以上の人が死んだというふうには主張しておりますが、これほど大きな海難事故、日本政府の発表によっても五〇〇名以上の人が亡くなっているこんな大きな第二次大戦後最大の海難事故に対して、日本のマスコ

ミが一行も報道しなかったということがいまだに理解できません。

それはその事件当時の話ですね。

はい、そうです。

今示したのは九月一八日の釜山日報なんですけれども、これはもう連絡船で釜山に着いたら、もうすぐその足で告発したと、こういう感じになるわけですか。

はい、そうです。

と、ここに書いてある内容は、そのときにお父さんが新聞社に話した内容というのが書かれてあるわけですね。

はい、そうです。

それからあなたのお父さんは、それ以外にも新聞社や行政機関に浮島丸事件のことを告発したり、相談に行ったりということを書かれたんですか。

私の記憶では相当たくさんあちこちの新聞なり行政機関なりに訴えて回ったというふうに記憶しております。釜山日報の次にはソウルの京城日報という新聞の日本語版にその記事が載りました。それは一九四五年の一〇月の話です。それで同じ一〇月にソウルに民主衆報という

新聞もありました。そこにも出ました。それからその当時韓国は米国の軍政下にありましたけれども、米国の軍政庁にも訴えたということを書いておられます。これは父から聞いた話ですけれども、父が韓国の米軍政庁に訴えたのを韓国の米軍政庁から日本を占領していた日本の軍政庁のほうに調査依頼をしたという話を聞いておられます。

そうすると、韓国ではこの浮島丸事件についてはかなり報道がなされていたんですか。

現在私が保管している新聞記事のスクラップブックだけでも相当な厚さになります。それからKBS、それからソウル放送のSBS、KB S、SBSそれぞれのテレビ局で作った報道番組のビデオも私が持っておりますけれども、それだけでも二〇個くらいになります。そのほかにも手紙だとか陳情書だとか、私が保管している資料だけでも包みにして三つぐらいにはなります。

そうすると、この浮島丸事件というのは韓国内ではかなり有名な事件として取り扱われているわけですね。

人によって違うと思いますが、若い人たちはもう五〇年も前の大したことない事件だというふうに思っているかもしれませんが、日帝時代を知っている私たち以上の世代にとっては非常に大きな事件として記憶しております。

それでそういった韓国での報道は、この浮島丸の事件の原因なんかについてはどういったように言われているんですか。

余り簡単に一言で言えないかもしれませんが、全般的な論調としては、自爆であると、故意による爆破であると、そして日本政府は遺族、犠牲者に対して応分の陳謝と補償をすべきであるというふうなのが一般的な論調です。

この裁判についてもかなり報道されているんですね。

はい、たくさん報道されています。一番近くではこの一〇月四日の光州日報に私たちのこの証言について社会面で大きく取り上げられました。

そうすると韓国内でこの裁判の行方というのでもかなり注目されているというこ

とですか。

はい、そういうふうを考えております。

この浮島丸の事件の原因とか、それから乗船者数、死亡者数ですね、これについては、あなたのほうに書いてもらった調査表に、あなたが聞いた話として詳しく書いていただいているんですが、ちょっとこの点についてお聞きしたいんですが、

甲B第四〇号証を示す

この質問番号11のところに、事故の原因についていろいろな根拠をもとに自爆であるというふうな記載がありますね。

はい。

このいろいろ書いてあるうち、あなた自身が見た、聞いたという事実というのはどれですか。

先ほど言いましたとおり、船が停止したときにボートが降りて行ったということ、それから爆発した途端に上にはね上がって落ちてきたということ、それから爆発音を何度か聞いたということ、それから水柱

が立たなかったということは私自身が直接経験したことです。そのほかのことは父から聞いたことあるいはあとから報道を通じて知ったことがありませんけれども。

そうすると、例えば出航前に乗務員たちが釜山に行かないと言って、トラブル、命令違反事件、そういうのがあったということが記載されていますが、これはどこからの情報ですか。

父から聞いたこともありますし、一九八五年の東亜日報の記事で知ったことがあります。

それから航海の途中で爆破されるという、そういう流言が乱舞していたというようなことが書かれてありますが、これはどこからの情報ですか。

生還者の人たちが何人もそういう証言をしているので、それで知りました。

それは生還者から直接あなたが聞いたんですか。

私が直接聞いたこともありますし、父を通じて聞いたこともあります。その爆破されるという噂が流れていたと話していた生還者の名前は分かります。

か。

分かります。

分かるだけおっしゃっていただけですか。

女性としては濟州島の方で高■善さん。

それ以外には同じようなことを聞かれた方、ありますか。

ほかにもいますが名前は記憶していません。あとから記録を見れば分かります。今ちよっと思いいせないですけれども。

その高さんという方からはあなたが直接聞いたんですか。

間接的に聞きました。

間接的というのはだれを通じてですか。

東亜日報の李鐘珪記者から聞きました。

そうすると、あなたが直接生還者から聞いたというのはあるんですか。

あります。

その方はお名前分かりますか。

たくさんいますけれども、思いいせません。全部記録はあります。

それから、乗務員が航海中に私物を海に投げたのと、これはどこからの情報ですか。

先ほどお話ししましたとこの金■連さんが見たということをお私に話しました。そのほかにもその点についての生還者の話がたくさんあります。

金■連さんからはあなたは直接聞いたわけですか。

はい、直接聞きました。

その金■連さん自身が乗務員が私物を海に投げるのを見たのと、こういうことなんでしょうか。

はい、そうです。そういうふう聞いております。

それから乗務員が子供たちに、おまえたちはかわいそうだなあ、と言ったというのがありますけれども、これはだれから聞いたんですか。

韓国で浮島丸事件についての証言を集めたものが出版されているんですけれども、そこで見たというふう記憶しております。

そうすると、これはあなた自身が直接だれかから聞いたわけではないんですね。

直接聞いたものではありません。

それから乗船者数なんです、先ほど七〇〇〇名から八〇〇〇名いたんじゃないかということをおっしゃいましたが、これは何を根拠にそのように考えられるわけですか。

父が生存しているときにそういうふう強く主張をしておりました。お父さんは、その数について、なぜそれぐらいいたかということについて、何か根拠があるんでしょうか。

父が何を根拠にしていたかは分かりません。乗船者の名簿についてですけれども、父が労働者たちを引率して乗船したんですけれども、その人たちについては、先ほど言いましたこの金■連が名簿を作って海軍警備部に提出をしております。そういうふう当時名簿を作ったにもかかわらず今になって乗船者名簿はないと言いつ張っているんですけれども、数時間ではなくて三日も四日もかかる航海で、水も食料も用意しなければならぬのにどうして名簿なしにそんな航海ができるのだろうか、それが非常に疑いを抱くところです。

日本の三七〇〇名余りという乗船者数の発表については到底信じられないと、
こういうことなんでしょうか。

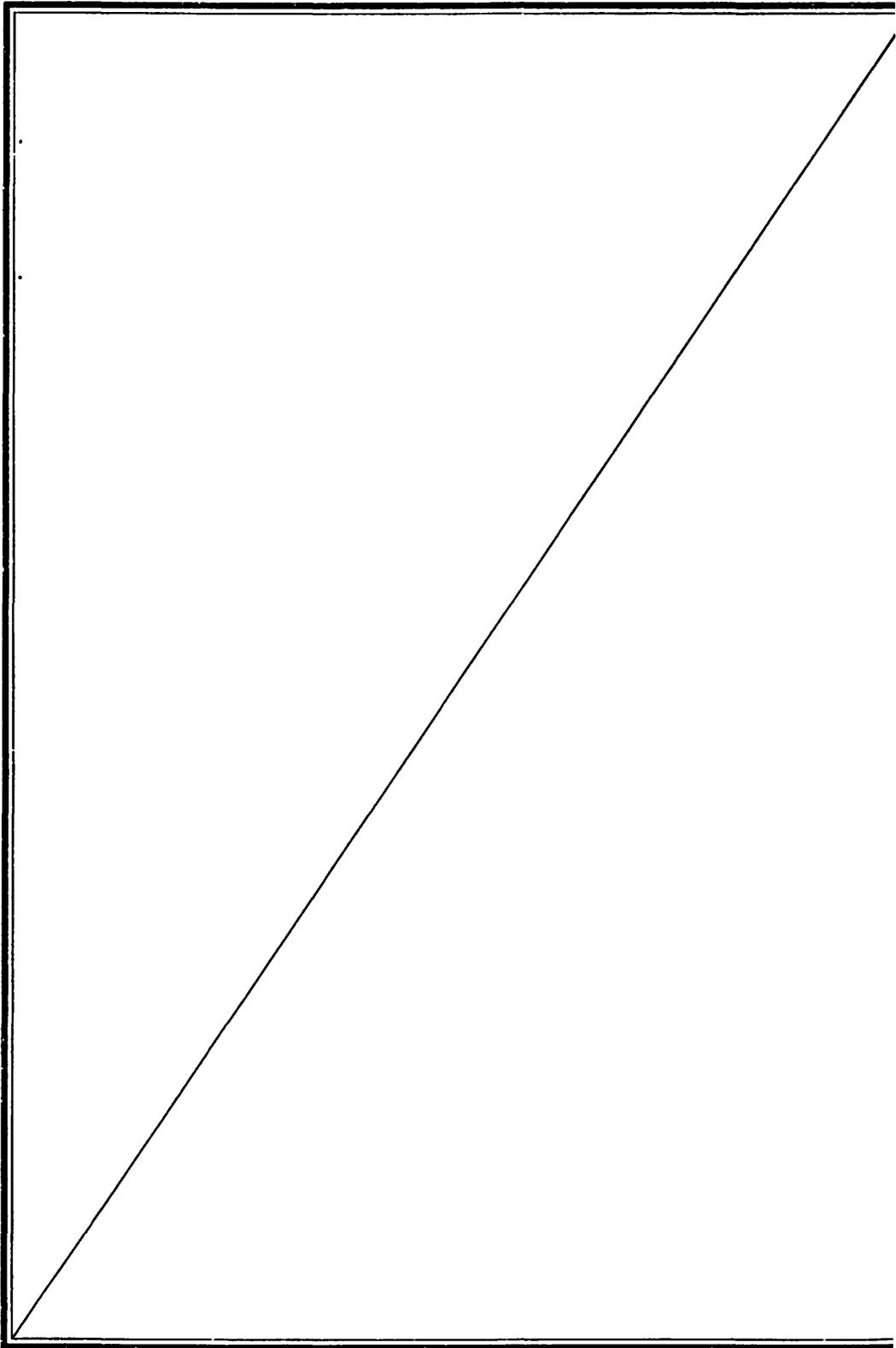
根拠は確かなものではありませんけれども、私の今の立場としては信
じることができません。

それから死者数ですが、日本の発表では五四九名ということなのですが、こ
の点についてはどのように考えていますか。

この数字も、現在の私としては納得できません。

あなたとしてはどのように考えるんですか。

私の立場としてはとてもこの死者の数字についても信じることができ
ませんし、またこの死者名簿にないけれども、自分の親族が浮島丸
事件で亡くなったという方もおります。今話しました死亡者名簿に名
前がないけれども、私の父は私の知っている人が浮島丸事件で亡くな
ったという手紙を受け取ったんですが、その手紙を後から提出するこ
とができます。



原告ら代理人（武田）

韓国では死者数についてはどれぐらいであったというような報道がされているんですか。

正確には分かりませんが、日本政府の五四九名に対して韓国では数千名が亡くなったであろうという報道がなされております。

今回あなたが日本で裁判をしようと、裁判に参加しようというふうにした理由というのはどういうことになりますか。

まず第一に日本政府の責任でもって浮島丸の爆発原因について真相究明をしてほしいということ。二番目にその真実が明らかにされれば当然のことながら犠牲者、遺族に対して心からの謝罪をしてほしいということ。三番目に父を失って水準以下の生活をしなければならなかった、そして教育も受けられなかった遺族に対して応分の補償をすべきであるということ。それから四番目に長い五〇年もの間寂しく異国である日本をさまよってきた御遺骨に対して、どうして日本は遺族たちに返してくれないのか、このように子供たちが生きて

いるのにどうして母の遺骨を返してもらえないのか理解できないということです。五番目には徴用された人たちは全く自分の意思によらずに徴用されたものです。そして日本にまだ返還されていない遺骨も何年もたつてからだれがだれの骨か分からない状態で保管されているというふうに聞いております。これらの御遺骨が韓国に返って、皆さんの合同で保管し追悼することができるようには日本政府の責任で追悼碑なり何なりを建てていただくことが日本政府としての謝罪の表れであり、またそれが礼儀であろうというふうに考えてこの裁判を起こしました。

それで簡単に確認しておきますけれども、お父さんはソウルから故郷に帰って、また土木の仕事を始めたんですよ。

先ほども申しましたように、帰国してから一年ぐらいはお父さんは浮島丸事件を究明することで東奔西走しておりまして、私たち子供たちのわずかな商売でもって命をつないでおりましたけれども、一年ほどしてからお父さんも落ち着いてきて土木の仕事を始めて、私たち兄弟

に対しておまえたちも学校に行かなきゃいけないということで私たちに教育をしてくれました。

お父さんは今現在はもう亡くなっているんですね。

はい。

お兄さんは現在は行方は分かっているんですか。

お兄さんも亡くなりました。

そうすると、あなたの家族の中で先祖の供養ができる立場というのはあなただけということですね。

はい、先祖の供養をするのは私しかおりません。

原告ら代理人（中田）

今現在、あなたは浮島丸事件で亡くなられた方のうち、遺骨の返還を受けている方がおられることは聞いておられますね。

はい、聞いて知っております。

お父さんはもちろん、あなた自身もこの浮島丸事件についてはずっと関心を持ってこられましたね。

はい、そうです。

一九七一年、一九七四年、それから一九七六年、三回にわたって遺骨が返還されているようですが、当時返還の動きがあるということは知っておられましたか。

何年度であったということは正確には分かりませんが、返還があったということは知っております。それから、釜山霊園というところで、浮島丸事件の犠牲者だけではなくて、第二次大戦中に亡くなった軍人、軍属の遺骨をおまつりしているんですけれども、釜山霊園が日本から遺骨を受け取ってきたという話を聞いたことがあります。

浮島丸事件に限らず、戦争で犠牲になって日本で亡くなった人の遺骨が韓国に返ったとそういうことですよね。

そういうふう聞いておりますが。

ただ少なくともあなた自身に対して、例えば光州市とかから遺骨を返すとかそういう話は一切これまでなかったんでしょうか。

一度もありません。

あなたの知っておられる方で遺骨の返還を受けた方はいらっしゃいますか。

ここにいらっしゃる文乗植氏をはじめ何人かです。

遺骨の返還があった当時。

それは分かりません、知りませんでした。

周りには特に知り合いの方とかはいらっしゃらなかった。

いませんでした。いたかもしれませんが私は知りませんでした。

じゃあ特になぜ自分の遺骨が返らないんだとか返してもらった人はどうやって返してもらったのかとか、そういうところを公的機関に交渉に行かれたということは当時なかったんでしょうか。

問い合わせをしたことはあります。釜山霊園にも問い合わせをいたしました。そして釜山霊園に私の母の遺骨があるというふうに聞きました。

お母さんの遺骨が返っている。

はい、釜山霊園が私の母の遺骨が返っていると言いました。

あなたはじゃあそれを確認に行かれたことはあるんですか。

確認には行きませんでした。釜山靈園の話は私にとってはおよそ信憑性を欠くものだと思われましたので行きませんでした。それは行政機関からも何らの連絡もありませんでしたし、釜山靈園のほうから私に連絡してきたわけでもありません。ただ私が電話で問い合わせたらあると言っただけでしたので、信じることはできませんでした。

釜山靈園に問い合わせをして返っていますという答えをいただいたのは、時期的にはいつごろの話ですか。

確実に何年と言えないんですけど、一九七〇年代の中ごろだったと思います。

確認ですが、返っているという説明を受けてるのはお母さんだけ。

私が聞いたのは母の遺骨があるかどうかということだけでしたので。お姉さん、妹さんについては確認をしてないということですか。

はい。その一九九二年に祐天寺に行きましたときに、祐天寺のお坊様が私の母たちの遺骨があるというふうにおっしゃってましたし、厚生省の関係者も名簿にあると言いましたので、今も母たちの遺骨は祐天

寺にあるものと信じております。

そうすると、釜山靈園からはお母さんの遺骨は返っていますよという説明は受けてるんだけど、その後一九九二年、祐天寺からはお母さんの遺骨はまだ保管してますよとそういう説明を聞いているということですか。

一九九二年に祐天寺で確認した後、もう一度釜山靈園に問い合わせたんですが、そのときは既に釜山靈園自体がプライベートな私的な団体だったので解散してなくなってしまったので確認のしようがありませんでした。

釜山靈園が解散した後、今はそれはどこが管理しているわけですか。
全然分かりません。

裁判長

反対尋問はありますか。

被告指定代理人（岸）

ありません。

裁判官（田邊）

あなたは船の機関室や倉庫などに好奇心で前を通りかかったりしたことはなかったですか。

ありません。

船の中にいた日本の兵隊はどういうような行動をしていたんですか。

直接見たものはありません。先ほど兵隊たちが自分の私物を海に投げ入れていたとか、子供を見てかわいそうだなと言ったというような話は後から聞いたものです。

(以上 立作みか)

京都地方裁判所第一民事部

裁判所速記官 鈴木秀子



裁判所速記官 坂本史



裁判所速記官 中島ケイ

裁判所速記官 立作みか